

森のふくろうへの独言

柳田国男「狗の心」から

小田 富 英

届くか

わが無音の独言

訊けるか 翁の再生の詩

翁のタイトルのつけ方はしゃれている

桃太郎の誕生がその典型だけれども

このいぬのころはしゃれを超えて挑戦的だ

世は神と神の子が支配する

人間中心の帝国時代

いぬにもころがあるなんて

いったいどれくらいの神の子が

信じていたのだろう

翁は

ずっと抱えていた

おいぬさまの食料保存の法則を確かめるべく

モリと名づけた秋田犬の観測を続けた

モリは見かけによらず遠い先代の性癖を

頑なに保持する古風ないぬで

獲物を咬えてきても

褒められるより匿す癖があつた

これこそが

知りたかつた動物の心根

幻想の帝国に胡座かいている

神の子の心の伝承に

逆転写の実像となつて

疑問解決の

糸口となると思つたはず

モリの先代とは

絶滅した日本狼か大口真神か

それとも鍛冶屋の婆か

モリの私有財産の記憶を確かめ

モリの目線を追つてシンシンと心を通わせる

翁は一体何を掴みたかつたのか

幻想の帝国の終焉を狗の心で見たのだと言え

翁の詩は再生するはず



角

詩誌

第71号